

南方(比島)

比島戦に機動工兵隊

として生き残る

山形県 伊藤 佐造

昭和十八(一九四三年)一月、満州の牡丹江省、勃利戦車第二師団工兵隊に入隊、一カ年間勃利で初年兵として教育を受け、昭和十九年五月頃勃利を後にして、宮崎県川南村の広瀬原挺進工兵隊へ転属しました。隊は滑空隊で、今時で言えばグライダー隊の工兵でありました。

本来は、既に初年兵教育を受けた二年兵であるのですが、工兵としての新編成の滑空隊ですから、グライダーの教育を受けることとなり、改めて新

兵科としての初年兵教育のやり直しでした。ですから二年兵から初年兵に逆戻りということ、それだけ苦労があったわけでした。

しかも、そこには古い兵隊である三年兵・四年兵がいる上に、新しい兵科であり、また新しい部隊であったから苦労の連続でありました。しかも、兵器は銃のみ、ほとんど歩兵と同じような教育を受けたわけであります。

ただ、戦車攻撃や爆破の演習が多かったようでした。部隊は二個中隊と機材小隊で一つの部隊を編成していました。

十月頃、動員命令が出て出動準備が始まりました。第一中隊が先発、軍艦で出ることになり、一

週間位経ってから本隊が出発しました。

防諜名は鸞集団、機動工兵隊で、部隊長は福本賢一少佐（大隊編成）で、下関か、門司か分らないが船は、太平洋へと出ました。船は、大阪商船所属とかの「日向丸」「青葉山丸」二隻に、巡洋艦の編成で進みました。

船の生活は何日続いたか判らないが、船は積んだ荷物と人でいっぱいです。便所は棚を作り、その中で用を足す。尻に波のしぶきが来て寒かったものです。

台湾の高雄港に入り、ここで見習士官の一個中隊位が下船しました。そのため、大分船倉は隙間ができました。そこで衣替えとなり、半袖、半ズボンの夏用の服装になりました。脱衣した被服は梱包して下船。この時、先発の軍艦で出港した第一中隊の兵二人が乗って来ました。

話を聞くと、上海沖で魚雷命中とのこと。隊員は甲板に集合して、中隊長が「飛び込め」と号令をかけ飛び込みました。巡洋艦からロープを投げ

てくれた。皆、ロープを押さえた手がしびれて離れたものが多かった。その内二人はロープに命綱を結び、そのまま船に引き揚げられて助かった、とのことでした。

我々が前の艦に乗っていたら、と思うと、運が良かったなあとつくづく感じました。

高雄港を出てから何日か後、島の近くに止まる。どこの何という島か誰も知らない。「上陸準備」の声で、完全軍装をして整列したが、前の人が進まない。

そのうち砲の音と鉄板の音がして、命令の内容は何も判らない。飛行機が来たのでしょうか。だんだん前に進むと縄梯子で下りるのです。下には小さなエンジン付きの舟があった。六人位乗ると動き出した。あたりは大分暗くなった。船長の命令で「降りろ！」の声、ドボンと降りたら腰まで水です。大事な銃も水の中です。浅瀬の方へ歩いて上陸しました。砲の音は終わったようだが暗くて

何も見えない。砂浜のようでしたが「夜明けまで動くな」と声が聞こえました。

「集合！」の声で目が覚めました。皆は砂の上に寝ていました。点呼の時、副官の訓示があり「こは、フィリピン島のサンフェルナンド。その海はリンガエン湾である。向こうに見える大きな二隻の船は、昨夜までお世話になった船だ」とのことであつた。

船からの荷揚げ作業となり、浜に荷を積み上げました。荷物は「日向丸」の物と「青葉山丸」の物が一緒になつたため、品分けとなりました。その仕分けの最中に、急に音がしたので上空を見ると、敵の飛行機六機です。高くて我が軍の弾丸が届かないが、忽ち、爆煙で敵機が見えなくなる。我々は

「やった、やった」と安心していきますと一機が、近くの山すれすれに来て、「青葉山丸」の途中に爆弾を落とし、これが爆発しました。そして船は燃え始めました。「青葉山丸」の荷物の運搬は中止と

なり、我々は浜辺より少し離れた所に宿営することとし、荷を宿舎に運搬しました。「青葉山丸」は一昼夜燃え続けて、船は傾き遂に沈没しました。そして船の荷はほとんど運搬できませんでした。しかし、兵も船員も無事とのことでした。

二日後の朝早く、飛行機がうるさく飛ぶのを寝ていて聞いていました。その時、不寝番が、敵の艦船数十艘が来たと言います。二階に上がって見て驚きました。夜間に、砲も撃たずに静かに来たらしい。友軍も撃たずに、飛行機だけ行ったり来たりしただけのようでした。

炊事係は、飯の準備、外の人は戦闘準備だと思つたら移動準備でした。山の麓まで来たら「食糧持って来い」の命令です。器材小隊は小型自動車を取りに行く。浜辺に行くと、敵は射っていないが、運転手はブルブルふるえて「帰る、帰る」と、うるさく言うのです。一番近いところの箱二つ、三つ積んで来て開いたら「さざえ」「大豆」で、米は全く無かったので残念でした。

中隊も本部も、バギオに向かって浜辺の路を行つたのに、部隊長や副官は浜辺の道路でなく、山越え、谷越えで、三日もかかってバギオに着きました。

バギオで一週間位、荷物運搬でした。敵は一旦沖へ出て行ったのですが、二日目に来る時は撃ちながら来たとのことです。どちらが先に撃つたのかわからないとのことでした。

バギオで十日位過ぎて、夕方、部隊全員集合、夜の移動が始まりました。道路には一キロメートル毎に標示がありました。二〇キロ地点を過ぎると崖崩れ、さらに一キロ位行くと橋の補修です。崖崩れと橋の間に三人位ずつ入れる壕を造り、昼は寝て、夜間に作業をしました。

ルソン島は一月、二月は内地の夏です。雨は降らない。草木は赤く枯れる。久しぶりに工兵隊の作業です。エンピ（スコップ）を背負う役です。他にツルハシ、鋸、斧、それぞれ役目があつて、

銃の外にこれらを持つのですから、移動となると大変でした。木を切る人、土を盛る人、皆手分けで作業をする。崖崩れは案外楽に終わったようですが、橋の橋脚を造ると石を運ぶのに、とんでもない苦勞をしてみました。

大きな石は挺棒でころがして運ぶ作業ですが、なかなか進まず、資材や器具は輜重隊が運んでくれると思っていたのですが、全部自分の隊で賄って仕上げるのでした。

そのような作業の間に食糧受領に行くのですが、往復に二日間もかかる。作業が終わってまた移動となり、今度はゲリラ討伐とのことです。再度二〇キロ地点にUターンし、右の道路に入って進む。夜明け前に山の斜面を崩して休息しました。

夕方、部隊長が怪我（負傷）との連絡があり、護衛兵三人を残して前進しました。古い発電所跡で休む。夕方ゲリラが射つて来たので出動準備をして進むと、ゲリラは足が早くて、一夜で峰まで

上がって逃げて行った。

一日休んで、今度はカンバツク、二〇キロ地区からバギオを過ぎて、イリサンで米軍と交戦しました。工兵は地雷や爆薬があつてこそ工兵の仕事です。小銃だけでは何もできません。しかし指揮をとる中井大尉は、陸士出身のバリバリで「バギオへ敵を入れるな、ここで頑張れ」の一点張りでした。

敵は長距離の迫撃砲に爆弾です。友軍の飛行機はサンフェルナンドで一機見ただけ、来るのは敵機だけです。夜の内に谷間に下り、飯盒で飯を炊き、幹部と戦友で粉味噌湯で食事をする。

夜が明けると、また砲弾と敵機の機銃攻撃が来ます。そして伝令が来て中井隊長戦死の報が入りました。迫撃砲らしいとのこと、その後部隊の指揮官は西垣大尉となりました。この人は年長者でしたから「後方へ下がれ」の命令でバギオまで退却しました。バギオには師団がいました。

軍隊は連隊とよく言ったものだ。小さな部隊が第一線へ、大きな部隊は後方にいる。バギオに集結した兵は三分の二位、斥候や連絡に出た人達は帰って来ない。山だから方角を間違えたのか、砲弾に倒れたのか判らない。部隊長の怪我が良くなつてきたら、なお後方に退却する。その頃から食糧も無くなり、マラリアや、栄養失調で倒れる人が出てきた。部隊長が指揮を取ってから戦闘は無かった。

だんだん山岳地に入り、ますます食糧確保が困難になった。食糧は最初の頃は稲の穂を鉄帽に入れて突いて米にしたが、山岳地では芋しかない。山を下り芋を掘り、谷間に水を求めに行くと、兵隊の仏が足の踏み場のない位倒れていました。仏の靴を頂くかと思つたが、皮が固くて使えなかつた。特に靴は皆こわれて非常に苦労しました。

部隊の兵も少なくなつた頃、明兵団工兵隊転属、戦闘はなくなり終戦となり、武装解除になりました

た。病人は上の道路まで背負って登る。一人の病人は上の道路まで背負って登る、一人の病人を四人位、交替で運びました。

そこには米軍のトラックが待っていました。トラックの中に米兵二人が銃を持って監視しています。最初の関所で、一人ずつ登録（住所と氏名）です。

相手は日本人の二世の米兵の事務官でした。捕虜の私達は、駅まで歩いて、汽車でガランバン捕虜収容所に入りました。食事は粥で、作業は別にあります。戦闘中に斥候に行つて帰つて来なかった人と会いました。山ですから方向が判らず、道路に出た所でマリアに倒れ、道路の側に寝ていたら、米兵の車が来て、車にのせられ、二、三カ所移動して、ここに来たとのことでした。その人は太っていました。食は良かったが、皆が来てから粥になったとのことでした。同年兵におれの部隊の人も来ていると教えたら、会いたくないと言う。捕虜は早いも遅いもない皆同じだ、気

にするなどお互いに励まし合った。

間もなくガランバンより、市街地の油地区に移動しました。「PW」とペンキで背と尻に書いた衣類を着て、整地や木工事として炊事場や、米兵舎の仮設の仕事をしました。食事は普通の米の飯を食べることができ、非常に美味かった。

昭和二十二年十一月、復員、ようやく福島駅に来たら雪降りて非常に寒かったです。家の部落は農家ばかりでしたが、家は大工業で、一日働いて白米三升の貧乏暮らしでした。衣類の配給は、米の供出の多い家だけでした。

しかし比島で芋を掘って、唐辛子で味付けをして食べた思いをすれば、食糧不足とは思えません。ただ、弾丸で倒れ、病で倒れた戦友は、誰の看護も、治療も受けることができず、その思いは、いかばかりだったろうと痛切に感じます。親たちの事を考えれば察するにあまりありません。

戦後、何年か経ってから、元幹部の人の努力で、

生存者の名簿を作成して送って頂きましたので早速皆に呼び掛けて、第一回の戦友会を池袋で開き、さまざまな思いで一夜を過ごしました。次は北海道・東北・九州・最後は東京の九段に集まり一応終わりとしました。

比 島 戦 記 前編

バレテ峠攻防戦

鳥取県 岡 崎 誠 友

バレテ峠北麓・大和谷陣地で

三月から五月末までの情況

私は昭和二十(一九四五)年三月上旬、サラクサク峠でアメーバ赤痢に罹患し、単独、大和谷陣地に治療のため帰されました。

当時は連隊本部の軍医さんも薬を保有していて、注射や投薬をもらったので二日程休んで良くなりました。快方に向かった時絶食していたので、猛烈に空腹を覚えました。同年兵の獣医部下士官候補で指揮班にいた椿野幸一伍長が、私のために連れてきた軍馬を全部第三中隊に渡したので、軍馬の葡萄糖注射薬がいらなくなったので、私のために飯盒に注射液を入れ、貴重品の乾パンを少し入れて炊いて、少しずつ飲ましてくれ、元気を取